

暴力不寛容社会

今年のアカデミー賞では、濱口竜介監督の「ドライブ・マイ・カー」が国際長編映画賞を受賞し、2009年の滝田洋二郎監督の「おくりびと」以来、日本映画としては13年ぶりの快挙です。以前からカミさんと見に行こうと言いつつ未だ見に行っていないのですが・・・もう一つ今年のアカデミー賞で作品表彰以上に話題となったのが「ウィル・スミスの殴打事件」でした。

30年以上前東京プリンスホテルで開かれた大島渚・小山明子夫妻の結婚30周年パーティーで、挨拶に舞台に立った野坂昭如と大島渚が突然殴り合いの喧嘩を始めてしまい、小山明子が慌てて二人の間に入り殴り合いを収めた場面を思い出しましたが、この事件では酒に酔って最初に暴力を振るった野坂の方に非が在ったようです。

今回、コメディアンのカリス・ロックに暴力をふるったウィル・スミスに批難が集まっているようですが、これがウィル・スミスでは無く他の人だったら、平手では無くグーパンチでタコ殴りにしていたかも知れません。

現在は暴力に対して、非常に不寛容な社会となっており、暴力は絶対駄目だという風潮が在りますが、一方では、その暴力を起こさせ無い一未然防止する社会にはなっていないと思います。

あの場面でも、聴衆がカリス・ロックのくだらないジョークに批難の声を上げるかブーイングを送っていたら、このような事件は発生していなかったでしょう。

ところが逆に、ジョークに笑い声を上げたため、世の中への警鐘として平手打ちを食らわせた様に思えます。カリス・ロックを平手打ちにした後舞台を降りるウィル・スミスに何かカッコ良いものを感じました。

昔は暴力肯定社会で、名誉を傷付けられたら決闘や仇討ちに発展することもあり、これらの結果が人々に賞賛されることもありました。しかし、これらには一定の作法や決まり事が在り、ただ単に暴力に訴えていた訳ではありません。

漫画や安物の物語で男同士が思い切り殴り合ってその後親友となるような陳腐なストーリーはたくさん在りますが、現在は病的なまで暴力忌避社会になっているように見えます。しかし、いくら口先で暴力はいけないと言っても暴力が無くなった訳ではありません。暴力を抑圧する社会的風潮の中で、逆に、益々陰湿化している様に感じます。

人々が互いに相手の人格を尊重し合い、他者の意見に耳を傾け、自発的に利他的な行為が出来る様にならなければ、暴力の無い社会は生まれないのでは無いでしょうか。果たして、人類がその様な高潔な意識を何時持てるようになるのかと思うと暗澹たるものがあります。

さて、話は大きくなりなりますが、国家間の暴力である戦争には、暴力肯定の時代にはある程度のルールがありました。国家には戦争する権利が在ると考えられ、「これから戦争を始めるよ！」と宣言するため、開戦に先立って相手国に宣戦を布告するのがルールでした。太平洋戦争において日本が非難されるのは、宣戦布告する直前に攻撃を開始してこのルールに違反した事も一つの要因です。

第二次世界大戦の悲惨な結果により戦勝国も敗戦国も不戦の誓いを立て、紛争解決の手段として戦争をしないことを誓いましたが、長くは続かず、その後何度も世界各地で戦乱が起きています。

そして、不戦条約に違反しないように、動乱とか武力紛争とか侵攻とか作戦とか言葉を代えています、中身は戦争そのものです。

第二次大戦以降、宣戦布告して始まった戦争はありません。

戦争忌避の風潮の中で、逆に、戦争はますます陰湿化し、止めどの無いものとなっています。

戦争という言葉を使わず、「これは戦争では無いのだから」とルール不在の無差別で悲惨な殺戮が繰り返されるようになっています。